

特別陳列 没後30年 田中太郎 ー誠をつくす彫刻ー【近現代彫刻】

国宝《土佐日記》(帖首) 藤原定家 前田育徳会蔵
ー「よみがえった文化財ー保存活用を支える修復技術ー」よりー

田中太郎《母子群像》1985年 石川県七尾美術館蔵
ー「没後30年 田中太郎ー誠をつくす彫刻ー」よりー

- よみがえった文化財 ー保存活用を支える修復技術ー
- 名物裂の精華【前田育徳会尊經閣文庫分館】／ 琳派と五十嵐派【古美術】
- 特集 毎田仁郎【近現代工芸】／ 近代からの書の風景【近現代書】
- 天神画像と文房具【前田育徳会尊經閣文庫分館】
- 金沢城の絵師たち【古美術】
- ヴァリエーションズ【近現代絵画】／ 特集 小松芳光【近現代工芸】

- 展覧会回顧
- 2月の企画展示室
- 2月の行事予定

- 学芸室の人々
- 友の会予告
- アラカルト ただいま展示中

近現代彫刻(第4展示室)

特別陳列 没後30年

田中太郎—誠をつくす彫刻—

特別協力 石川県七尾美術館

1月4日(木)~2月12日(月・休) 会期中無休

学芸員の眼

田中が晩年に、制作における信念について語る機会がありました。いわく、表現は自分のなかにある。制作は、対象からその「真」をくみとり、すべてをかけて造形化する行為である。本心から自然と生まれてきた表現は、具象抽象にとらわれる必要はない……という内容です。確かな実力を基盤として、心から湧き出た尊敬や慈愛、感動を、具象抽象を問わず表現し続けた田中の表現を理解するのにこれ以上ない内容です。「心がなければ芸術でない」という制作態度をまっすぐ育てた田中の作品は、写実を極めたものはもちろん、意表を突いた組み合わせによる斬新なモチーフ、ユーモアにあふれる造形など幅広く、優しくて遊び心のあふれる唯一無二の作品世界を築いています。



田中太郎《椅子に寄り夢みるゆめ》1987年
石川県七尾美術館蔵

令和5年(2023)に没後30年を迎えた石川県七尾市出身の彫刻家・田中太郎を特集します。田中は寺院建築の装飾彫刻を学んだあと彫刻を志して上京、当時木彫の第一人者であった平櫛田中(ひらくしでんちゅう)に師事します。所属していた日本美術院彫塑部解散後は大きな派閥に属することなく、自らの作風を追い求めました。

本展は、3章構成で田中太郎の作品世界を紹介します。「Ⅰ 究めるころ」では、所属していた日本美術院彫塑部が昭和36年(1961)に解散するまでの作品を中心に、初期の木彫修行が活かされた作品を紹介します。「Ⅱ 敬うころ」では、田中の精神性が反映された作品を集めます。師を敬い、過去の巨匠に思

いを馳せ、仏教を尊ぶ。敬虔で真摯な心があらわれた作品は、観る者にあたたかな気持ちをもたらします。「Ⅲ 誠をつくす」では、田中の後半生における作品を紹介します。師・平櫛田中からの教えである「誠をつくし、心をこめて彫る」をもとに生み出された作品は、確かな修行に裏付けられた技術を基礎として、写実からデフォルメの間を自在に行き来しつつ、意表をついた組み合わせをもとめていく発想力と表現力に優れています。田中太郎の作品世界を存分に楽しんでいたかと思えます。

1月27日(土)には土曜講座を開催し、本展の見どころを紹介します。あわせてお楽しみいただけますと幸いです。



田中太郎《顔》1975年
石川県立美術館蔵

前田育徳会尊經閣文庫分館

名物裂の精華

1月4日(木)～2月12日(月・休) 会期中無休

名物裂といえ、茶器の仕覆や絵画の表装に使用されるちいさな裂地を思い浮かべますが、今回東京の前田育徳会から拝借した裂は、いずれも大きな裂ばかりで、利常が入手した当初の姿を思い起こさせます。

「いちご」と読む《覆盆子裂》は、数色の絵緯糸を浮織にして小花模様をあらわし、これが木苺の球果に似ることから、このような名称がつけられました。真田紐のような横縞が入ることも特徴です。

名物裂には珍しい木綿の裂は、「唐木綿」と呼ばれました。《白唐木綿縫取》は、雲形だけでなく、実は七宝や卍など、さまざまな模様が縫取刺繍であらわされていました。この裂が歴代藩主の甲冑や能装束にも使用されていたことから、新たに確認できたことです。

企画展示室(第7・8・9展示室)

よみがえった文化財

—保存活用を支える修復技術—

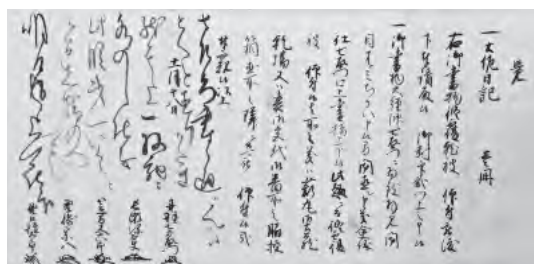
特別協力 北國新聞社、公益財団法人 前田育徳会、なら歴史芸術文化村
協力 一般財団法人 石川県文化財保存修復協会

1月4日(木)～2月12日(月・休) 会期中無休

本展は、藩政期から今日までの当地における文化財保存修復への取り組みを概観することを趣旨としています。そこで改めて確認されたのは、加賀藩主・前田家以来、文化財に対する深い敬意が保存修復の根幹となっていたことです。文化財への理解が深まれば、自ずと畏敬の念が興ります。このことが、当地における文化財保存修復思想の継承ということができそうです。

そして、文化財への理解は、単に歴史的、美術的な観点にとどまるのではなく、科学的アプローチによる知見からの検証や、拡張現実(AR)や仮想現実(VR)の技術も駆使した、総合的な判断に基づいたものであるべきとの考え方が浸透しつつあります。

当館のVRシアターも、そうした理解の深化に大きく寄与することが期待されています。また、光や空気による劣化や、人為的損傷、災害、盗難などを念頭にこれまで活用されてきたレプリカも、今日では、外観の復元のみならず、科学的根拠に基づく構造や材質、技法の検証を経て制作されるようになりました。これも、文化財の保存修復と活用に対する今日的な理解の在り方として注目されます。本展では、こうした技術の進歩にも着目しています。さらに国宝《土佐日記》、重要文化財《吾妻鏡》(いずれも前田育徳会蔵)をはじめとする、国・県指定文化財や加州刀の品名など、本展のコンセプトならではの豪華な取り合わせにも、是非注目していただきたいと思います。



《土佐日記 付属文書》前田育徳会蔵

古美術(第2展示室)

琳派と五十嵐派

1月4日(木)～2月12日(月・休) 会期中無休

本阿弥光悦、俵屋宗達、俵屋宗雪、喜多川相説、尾形光琳ら琳派を代表する芸術家は、熱心な日蓮宗の信徒という点で、加賀蒔絵の基礎を築いた五十嵐道甫と深いつながりがあります。彼らの創作姿勢は、善美を尽した造形は功德となると考える『法華経』の思想に立脚しています。そして、光悦は藩祖・利家以来加賀藩と関わりがあるほか、宗雪、相説も藩の御用を務めています。それはまた、金沢に招かれた道甫と後継者が、加賀蒔絵の様式を確立してゆく時期とも重なります。

今回は、3代藩主・利常が展開した加賀藩の文化政策の一側面として、京都の文化をどのように取り入れ、独自の美意識に転換していったのかを、「琳派」と「五十嵐派」を切り口として概観してみました。

前田育徳会尊經閣文庫分館

天神画像と文房具

2月17日(土)～3月20日(水・祝) 会期中無休

前田家が家祖と崇める菅原道真の忌日が2月25日であることにあわせて、毎年この時期には「天神画像と文房具」をテーマとした特集展示を行っています。「文房具」から連想するように、道真は「学問の神様」として崇められますが、さまざまな姿で描かれた「天神画像」は、「学問の神様」以外の道真の姿を伝えています。

敷物に座す道真を描いた《ほうりん 抱輪天神画像》ですが、よく見るとその表情は目を見開き、何かを睨みつけているようです。両肩も鋭く上がっています。本図は、そくたい 束帯姿であることから「束帯天神」とも称されますが、「怒り天神」とも呼ばれます。道真が座す敷物は、実は大宰府へ向かう船の中でとりあえず用意された綱を巻いただけのもので、道真は惨めさのあま

り、怒りをあらわにしたのでした。

《なわしりんすい 縄敷臨水天神画像》は、真っ白な髪 of 道真が水面を見る姿です。苦悩の余り、一夜にして白髪（一夜白髪天神）になった道真は、大宰府の川面に映った自らの姿に驚いたという「水鏡天神」の逸話に基づいています。

一方、梅の枝を持ち中国風の姿で描かれた道真像もあります。《渡唐天神像》です。道真は後に中国へ渡り法衣を受けたという、中世の禅僧の間で語られたエピソードに基づき描かれました。《渡唐天神画像》は真正面姿がほとんどですが、育徳会が所蔵する江戸時代の画僧月隠げっせんが描いた画像は、少し体を右に傾けているのが特徴です。



《抱輪天神画像》

近現代工芸(第5展示室)

特集 毎田仁郎

1月4日(木)～2月12日(月・休) 会期中無休

「自然が師」。この言葉は、毎田仁郎が師である木村雨山より教わった言葉の1つです。毎田が描く植物たちは、自身の観察・写生をもとにしています。例えば花を描くにあたっては、芽生え、開花、結実、枯れるまでを一貫して見つめ、花とは何かを自身で見極めた上で筆をとります。モチーフとなる四季折々の植物は、自宅の庭先から日本全国にその題材を求めて出向いて観察し、作品制作へと活かしていました。

このようにして描かれた毎田の友禅は、多彩な色使いでありながらも、ほかしの技術などを効果的に使用することで、全体として落ち着いた色彩となり、清楚な印象となっています。

毎田仁郎の創り出した加賀友禅の世界をお楽しみください。

近現代書(第6展示室)

近代からの書の風景

1月4日(木)～2月12日(月・休) 会期中無休

今回の展示では明治維新の元勳げんくんはじめ、日本文化を形成する芸術家などの魅力あふれた書とともに、昭和30年代半ばに収蔵された現代日本書道の名家たちの作品を展示いたします。戦後、書は会場芸術として表現が大きく変換しました。その表現形式は、高い壁面の美術館で鑑賞される作品へと発展、額装が主流となり、作品も次第に大型化していきました。このような会場芸術として「書とはなにか」という問いを持ちながら、幅広く、豊かに広がってきた書のあり方を追求する動きは、今も続いています。時代の変遷を顧みながら、時を経ても色褪せない書の魅力をお楽しみください。

近現代絵画(第6展示室)

ヴァリエーションズ

—画家たちの変奏曲—

2月17日(土)～3月20日(水・祝) 会期中無休

ひとつの主題や旋律が、様々に形を変えて表れる曲を変奏曲(ヴァリエーション)といいます。有名なところではモーツァルトの「きらきら星変奏曲」やバッハの「ゴルトベルク変奏曲」などは、お馴染みの名曲です。さて、多くの画家たちは、ひとつの主題(テーマ)を繰り返し描いており、その様相はまるで変奏曲のようです。ひとつの主題を一度の制作で極められる画家は希でしょう。かえって何度も繰り返し挑戦するだけの価値を認める主題との出会いは、画家にとっての幸福といえるかもしれません。今回の特集では、ひとつの主題に繰り返し挑む日本画家たちの作品をご覧ください。

古美術(第2展示室)

金沢城の絵師たち

2月17日(土)～3月20日(水・祝) 会期中無休

かつて金沢平野を一望する小立野台地の先端にそびえていた金沢城の御殿は、江戸時代を通して2度の焼失、再建を経て姿を変えながら、加賀百万石の中心としての役割を担ってきました。しかし明治14年(1881)、失火によって焼失し、その歴史に終わりを告げました。

現代に入り、石川県では金沢城の中核であった二の丸御殿を復元整備する取り組みを進め、御殿の内装についての調査も行っています。御殿の障壁画は、ほぼすべてが失われ、《唐花園》(中村神社拝殿天井画)を除いて現存が確認できません。今回の特集展示では、詳しい資料の残る文化庁指定の金沢城二の

丸御殿において、障壁画を描いた絵師たちを取り上げます。

御殿内部の障壁画を描いた絵師たちは、臨時の手伝いも含めると26名にのぼりますが、3つのグループ、①江戸から来た狩野派の絵師、②京都から来た岸派の絵師、③地元の絵師、に分けることができます。本展示ではこのうち、②に属する岸駒(1749/1756～1838)とその息子岸岱(1782/1785～1865)、そして③に属する佐々木泉景(1773～1848)の作品を展示します。彼らの残した作品から、在りし日の金沢城に思いを馳せていただければと思います。

近現代工芸(第5展示室)

特集 小松芳光

2月17日(土)～3月20日(水・祝) 会期中無休

小松芳光没後30年にあたり、所蔵する小松の作品のほか、今年度新たに収蔵となった作品等を紹介いたします。

小松芳光は明治36年金沢市に生まれました。大正13年東京美術学校聴講生となり、その後、植松包美に師事しました。昭和2年第8回帝展に初入選、13年第2回新文展特選。戦後は日展を舞台に意欲的に活躍し、21年特選、43年文部大臣賞を受賞。52年には加賀蒔絵で石川県指定無形文化財保持者となりました。また、昭和23年より金沢美術工芸大学教授として後進の指導にもあたり、44年に定年退官、名誉教授となっています。小松のモダンなデザイン感覚と加飾による独創的な意匠作品は漆芸界に新風を吹き込みました。



《瀟湘八景図屏風》佐々木泉景(左隻) 全昌寺蔵

展覧会回顧

皇居三の丸尚蔵館収蔵品展 皇室と石川—麗しき美の煌めき—

会期 10月14日(土)～11月26日(日)

丸3日にわたる皇居三の丸尚蔵館での作品返却作業のすべてを終え、皇居大手門をくぐると帳が下りはじめた日本随一のオフィス街が。吹く風は少し冷たく、ほてった頬を心地よく撫でていきます。お堀の前にそびえるビル群と向かい合わせに、いにしへの歴史を持つ皇居があることに、感慨を覚えました。

さて、ひと月半にわたって国立工芸館と共同で開催した本展は、5万人を超える入場者を数え閉幕しました。毎朝、列を作って開場を待ちいただいた多くの皆さまにも、感謝の思いは尽きません。そのような皆さまから異口同音に寄せられたのは、作品についての感動の言葉であり、皇居三の丸尚蔵館の至宝を、この地にながら観覧できる喜びの声でした。展示はもちろん、本展に訪れた皆さまの姿を通して、加賀前田家による文化風土の醸成があつてこそ、本展の成功があつたと実感しました。余談になりますが、毎日作品と対面できることは、この仕事の醍醐味で、至宝の数々から得る新たな気づきの連続でもありました。特に間近に見た《金沢本万葉集》の、和製唐紙と能筆の800年の時を超えた共演は、胸に迫るものがありました。皆さまも、次は新しくなった皇居三の丸尚蔵館で、至宝の数々をご鑑賞いただければ、きっと新たな発見があることでしょう。

本展の開催に向け、多大なご支援・ご協力をいただいた皇居三の丸尚蔵館をはじめとする関係各位に厚く御礼申し上げます。



第8・9展示室 第29回 北陸国展

2月22日(木)～26日(月) 会期中無休

北陸国展は北陸在住の国展出品者を中心に構成され、今年で29回展となりました。

国画会(国展)は昨年97回を迎え、毎年春に国立新美術館で開催される歴史ある公募団体です。草創期の絵画部には梅原龍三郎、香月泰男らが、写真部には野島康三、木村伊兵衛らがいました。

北陸国展での成果が毎年、国展での受賞者輩出につながっています。今回は絵画部14名、写真部16名が力作、大作を若手の新作も交えて約50点発表いたします。是非ご高覧下さいませようお願い申し上げます。

◇入場無料

◇後援 北國新聞社、テレビ金沢

◇連絡先 横江昌人(北陸国展事務局)

能美市秋常町25-1

第7展示室 令和5年度 金沢大学学校教育学類 美術教育専修卒業制作展

2月22日(木)～25日(日) 会期中無休

絵画、彫刻、デザイン、美術科教育の各分野の学士課程による令和5年度卒業作品を展示します。これらは、主に教職を目指す学生が、自らの学生生活の総決算として地道に努力を重ね、且つ創造的に研究し制作して完成させたものです。

未熟ではございますが是非ご高覧下さい。そして忌憚のないご批評、ご助言をお願いいたします。なお、在科生の作品も展示しますので、併せてご高覧下さいませようお願いいたします。

◇入場無料

◇連絡先 金沢市角間町 金沢大学
人間社会学域学校教育学類 江藤望
電話 076-264-5582

谷岡 彩(学芸第一課学芸員)

幼い頃、展覧会で印象派の作品に感銘を受けて美術に興味を持ち、大学時代に留学したフランスでは、憧れの作品を実際に観ることができ感動しました。一方、現地の友人と交流する中で、自分が日本人であることを強く意識するとともに、母国について知っているつもりで実は知らないことばかりだと気づかされました。帰国後、仏像や日本絵画を観に行くと、その美しさが留学前の何倍にも感じられ、身体に沁み込んでいくようで驚き、日本人として日本のことをよく学び、その魅力を発信していきたいと思いました。あの時の衝撃が、今の仕事に繋がっています。



学芸室の人々

友の会予告

令和六年度も友の会会員を募集します。次号(3月・485号)で募集情報を掲載し、手続き書類をお届けいたします。

◇会費 2,000円

◇受付期間 令和6年3月1日(金)より開始

◇会員証の有効期限…令和6年4月1日～令和7年3月31日

2月の行事予定

■ワークショップ 13時30分～15時 美術館講義室 無料 要申込 「屏風レプリカを作ろう」 屏風がどのようにできているのか、ミニ屏風を作ってその構造を確かめてみましょう！ 対象：小学生以上(小学生は保護者同伴) 定員：20組(1組2名様まで)		■土曜講座 13時30分～15時 美術館講義室 無料 3日(土) 「前田家伝来の名物裂―近年の調査結果から―」 学芸専門員 村上尚子 10日(土) 「近現代書の風景―「よむ」から「みる」へ―」 普及課長 深山千尋 24日(土) 「所蔵作家シリーズ2 鈴木華邨」 学芸第一課長 前多武志		■友の会会員限定！VRシアター体験イベント ①10時30分～12時10分 ②13時30分～15時10分 コレクション展示室 無料 11日(日) 国宝《色絵雉香炉》の超高画質3Dモデルを、コントローラー操作によって360度好きな角度からお楽しみいただけます。 (詳細は前号をご確認ください) ※現在、席に余裕があるため、当日の参加を受け付けます。 ※ご参加の際は必ず会員証をご提示ください。
---	--	---	--	---

《音色》おんじき

幅35.0cm 奥行40.0cm 高さ38.0cm
昭和51年(1976)

田中太郎 たなかたろう

明治44年～平成4年(1911～1992)

手を口に当てて声を発する仕草をする像。何かを呼び掛けているのでしょうか。にっこりと笑うような目は、声を届けようとする仕草と相まって愛らしい子どものような姿をしています。

愛らしく優しい姿の一方で、本作は仏教における、生きる者に対する尊い教えを発しており、そのため本作の題名は、「ねいろ」ではなく「おんじき」と読む、と作者・田中太郎は語ります。

田中太郎は、昭和9年(1934)に当時木彫の第一人者であった平櫛田中に師事しました。そのわずか2年後に院展初入選、そして昭和24年(1949)に日本美術院賞・白寿賞、昭和29年(1954)には日本美術院賞・大観賞と受賞を重ねます。昭和36年(1961)に日本美術院彫塑部が解散した後は、大きな派閥からは距離をおき、個展やグループ展を中心に発表を行うほか、太平洋美術学校にて更なる研鑽を積み、制作に励みました。

仏教を尊んだ田中は、写実指向の強い作品から、優しく温かなまなざしによって生み出された作品に加え、仏教に関わる生物や人物を表した作品やその教義や精神性を造形に反映させた作品を制作しました。仏の姿そのものを表さず、愛嬌のある表情と振る舞いから仏教の教えを造形化した本作は、高い精神性とユーモアに満ちています。

本作は特別陳列「没後30年 田中太郎―誠をつくす彫刻―」にて展示されています。会期は2月12日(月・休)まで。田中太郎のバリエーション豊かな作品とともにぜひご覧ください。



次回の展覧会

令和6年3月27日(水)
～4月15日(月)
会期中無休

前田育徳会
尊経閣文庫分館

天神画像と文房具

第2展示室

金沢城の絵師たち

第3・4・5・6展示室

第80回現代美術展
—洋画・工芸・写真—
3月29日(金)～4月15日(月)

ご利用案内

コレクション展観覧料

一般 370円(290円)

大学生 290円(230円)

高校生以下 無料

※()内は団体料金

2月5日は第1月曜日より

コレクション展示室無料の日

開館時間

午前9:30～午後6:00

カフェ営業時間

午前10:00～午後6:00

2月の休館日は
13日(火)～16日(金)

「石川県立美術館だより」に広告を掲載してPRしませんか?

広報紙広告ならではの **メリット**

- 地域に根ざした情報発信
- 石川県での知名度向上
- 自治体発行の信頼度の高い広報媒体

他エリア自治体広告もお任せください!

お問い合わせ **092-716-1401**

株式会社 **ジチタイアド**

福岡県福岡市中央区薬院1-14-5MG 薬院ビル7F 財源確保

※株式会社ホープの広告事業は、2021/12/1付で「株式会社ジチタイアド」に分社化しております。

石川県立美術館だより
第484号(毎月発行)
2024年2月1日発行
〒920-0963
金沢市出羽町2番1号
Tel: 076(231)7580
Fax: 076(224)9550
URL: <https://www.ishibi.pref.shikawa.jp/>

石川県立美術館は電源立地地域対策交付金を活用して運営しています。